ニューヨークでの日々

主婦の思索

江崎真佐子

江崎真佐子

主婦の思索

ニューヨークでの日々

TBSブリタニカ

江崎真佐子（えさき　まさこ）
昭和5(1930)年，新潟県佐渡生まれ。日本女子大学家政学部教育心理学科卒業。昭和31年(株)ソニー外国部入社。34年江崎玲於奈氏と結婚。ニューヨーク郊外のチャパカ在住。
主な著書『江崎玲於奈一家のアメリカ日記』
『江崎玲於奈一家のアメリカ天気図』

ニューヨークでの日々——主婦の思索

1981年8月5日　初版発行

著　者——江崎真佐子
発行者——吉田　稔
発行所——株式会社ティビーエス・ブリタニカ
〒102　東京都千代田区三番町28番地1　秀和三番町ビル
電　話　顧客サービス　(03) 238-5711
販　　売　(03) 238-5721
振　替　東京1-131334
印　刷——柳沢印刷所
製　本——小高製本工業

©Masako Esaki, 1981
0095-100092-4968
PRINTED IN JAPAN
落丁・乱丁本はお取替えいたします

¥980

目次

暮らし……5
枠をはずして 6
悲なく 13
展望 19
おそ咲き 25
暮らし 31
妻と母と 37
一母親の言 44
生きざま 51
旅……57
赤い空 58
一人旅 64
水とあかりと雪と 71
ある専業主婦たち 78

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

子育て 85
旅 92
ぜいたく 98
救い 104
着想 …… 111
もてなし 112
マナー考 119
ごった煮 125
話しぶり 132
思考 139
備え 146
逆手 153
着想 160
体質ということ 167

かかわりあい……173
とまどい 174
かかわりあい 180
非情 187
思いやり 194
聞き手 201
いとおしみ 208
つながり 214
男性からの認識 221
あとがき……228

装幀　蛭間重夫

暮らし

枠をはずして

まず最初にこう申させていただきます。私は江崎玲於奈の家内でございます、と。

そういたしますと、いろいろもやもやとしたものが取りのぞかれ、私の輪郭がはっきりして参ります。

読者の方々の、

「あれ、この人、名前を聞いたこともない人。アメリカ在住っていうけど、何していられるのかしらん」

など申します疑惑をぱっと晴らす効果がございます。そして、きっと、多くの方がおっしゃられるでしょう。

「ああ、あのノーベル賞の江崎さんの奥さん。だからアメリカにいらっしゃる。江崎博士が五十なかば見当だから、奥さんも五十前後というところかしら。あんなにお偉い人のご夫人だから、私の想像もできないようなお暮らしをなさっているんでしょうね。すばらしいこと。羨ましいわ」

本当に名もなく清くも美しくもない主婦の私が、こういう場で物を書かせていただけるのは、真に、その著名な主人のおかげです。文化勲章をいただくために日本に帰りました江崎について東京に参りました時、もの珍しさからか、ある新聞社の方が私にインタービューに来られ、その記者に乞われるまま、短いアメリカ体験記を書き出しましたのが、そもそものきっかけです。物書くことの訓練もうけておりませんし、そうした仕事をしたいと考えたこともありません。本当に運のつよい女だと、私もよくそのことを自認しております。

話はとびますけれど、二年ほど前に、あるコクテルパーティで話好きのインテリ女性に会いました。

こちらがへきえきするほど日本に興味をもっておりまして、やつぎばやに質問をあびせます。私も必死になって、反論したり同意したりで、疲れ果てるような数時間でした。

さて数カ月後に私の住んでおりますこの町チャパカで、「海外事情」と題してセミナーが開かれました時に、私宛に主催者から丁重な手紙が参りました。"日本の日"のスピーカーの一人になってほしい、と書いてあります。コロンビア大学の教授たちも、数多く招かれるその催しに、学もなく、特殊な体験ももちあわせておりません私が、末席につらなることなど考えてみただけでもおかしく思いましたので、そのことを主催者に電話で話しますと、

「いや、とんでもない。名の知れた学者などよりは、正直のところ、あなたに来ていただきたい。N夫人（コクテルパーティの女性）が、この人の言われることを聞かなければ損だと、つよ

くつよく推されている」

といわれます。

当日は予想もしなかった質問が重なりました。このスピーカーはあまり英語もうまくないし、おどおどしているようだから、質問ぜめでいじめるのはいけない、などとは、アメリカ人は考えません。遠慮のない問いに冷汗の出る思いがしましたけれど、まあまあ、無事にお役目終了。あけて地方新聞にこのセミナーの記事がのり、興味深かった話の一つとして、私のにもスポット・ライトが当てられました。博士号なし、職につかず、の人間ですから、紹介して曰く、チャパカの住人、マサコ・エサキ。

よく例に出されますので、ここで繰り返すのは愚かと思いますけれど、自己紹介の場合に、日本人はまず自分の所属している会社なり団体なりをもち出しますのに、アメリカ人は、自分が何者であるかを表明いたします。自分は○○社の社員であるということより、自分はエンジニアという技のある人間だ、が先になり、そのエンジニアの自分は、現在○○社で働いている、という順番になります。実際問題といたしましても、有能であればあるほど、職を変える可能性のあるアメリカ人は、○○会社との関係で記憶されていては全然意味のなくなる場合が多くあります。

この国では、他人をみます時に、できるだけ外側の枠をはずして、中身そのものでいこうとする傾向がつよいことは事実です。枠をはずす、というよりは、初めから、枠をつくらないの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

です。

女の集まりでも、卒業年度と、結婚した相手の出世度のかねあいで席をきめ勝ちな日本の同窓会とは違い、彼女のご主人が大会社の社長であるとか、あの人はＴＶの例の有名なプロデューサーの夫人、などということに、他の女はあまり注意をはらいません。彼女の真価ずばりで参ります。

年令のほうも、

「この間、大学のリュニオンに行ってきたんだわ。三十周年記念行事で盛大だったこと」などと偶然に言い出せば、年の見当がつくという程度のものです。

日本でよく申します、あの方はよいお家の出、などいうことも、ハンガリーから逃げて来た彼女が、いかにいい家柄に属していたといってみたところで、確かめるすべもなく、ハンガリーがシアトルであったとしても、そのお里はあまりにも遠すぎます。

出身校にしても、名門校名門校とさわぎたてるのは、主として東海岸の州のインテリだけのようです。その東海岸の小さな超有名大学出身の私の友人夫妻が、牧師として、中部の州に移っていきました。エリート意識をもっていると考えられては困るからと、自分たちの出身校を言わないですごしていたそうです。ところが、その大学の総長が近くに来られるという事件のために、名門出だということが住民に偶然に知れたのですけれども、住民たちは、その大学のことを知らなかった、という笑い話のような話があります。

職業にしましても、能力のある人で大会社勤めを快しとしない人たちもたくさんおりますから、官庁だの企業だのいう看板も意味がありません。

その上に、異なった文化を背にしているさまざまな人種の集まりとなりますと、一般に通用する外側の枠ができないのです。

しょせん、人は裸のままで、裸の相手にぶつかり、相手の持っているものを評価します。その人の持っているものだけが、ものをいいます。どんな職種であろうが、老いていても若くっても、名門出もコミュニティカレッジ出でも、適役であればPTAの会長になり、一住人の主婦でも、彼女から得るものが多いとみれば、大学の教授たちと一緒に、セミナーの話し手によばれます。

私はこの町で体験いたしましたセミナーの事件と全く反対の目に、日本のある婦人雑誌を通じてあったことがあります。

これもその婦人雑誌のインタビューから始まった出来ごとなのですが、一年間その雑誌に書いてほしいと依頼されました。ちょうどその前後に日本に帰りました私は、その当時の編集長にお目にかかり、主婦といっても生き方によってはたいへん個性的に美しい生活ができるものだと、その方のおほめをいただいて、書き出しました。私は新年号に第一回目をのせましたが、その前の十二月号に、編集長ご自身が、こういう人の書くものを来年から掲載すると、ご紹介くださいました。

さてその書きものをいたしまして、六カ月位たった頃だったと思いますが、今まで、私の名前だけのせていただいておりましたところに、江崎玲於奈夫人というタイトルがつきました。

雑誌社では、読者のなかから適当な人を選んで、人気調査のようなことをすると聞いております。編集室のどなたかか、あるいは、この調査のための人たちのなかに、こんな名の知れない人に書かせても仕方がない、あるいは、折角いいタイトルがあるのだからそれをつけたほうが効果的、という声があって、途中で変更になったのだろうと思います。

私は元来たいへん呑気なたちですので、あまり腹をたてることがありませんけれど、このタイトルづけを見た時には、むしゃくしゃいたしました。もし私の書いているものが、その本の読者にあわないものなのなら、そこで書くことを中止させるよう配慮してほしかったと思います。タイトルがあるかないかで、書いたものの内容のうけとり方が読者に違ってくる、ということなのでしたら、これほど馬鹿げた話はないと思います。

人を外側の枠で判断するということも、全然間違っているとは思いません。外側の枠をお持ちになる理由があるわけですし、またこうした基準がありますと、不必要な摩擦がさけられるに違いありません。

ただ、外側の枠がないと判断ができぬという思考方法は、枠のないもの、あるいは枠をつくりづらい対象がでてきた時に、判断が出来なくなる、という大きな落とし穴をだきかかえております。

またそれ以上にこわいことは、特に専業主婦の場合ですと、偶然ということに大きく左右されて結婚した相手の地位が高いことで世間に甘やかされ、逆に出世しない男の配偶者であるからと、自分を卑下した態度に出がちだということです。

日本人の男にも女にも、西洋人の持っている自分自身への誇りというものが育ちづらいのは、あまりにも枠にとらわれ、尊厳ぶっていばったり、身をちぢめて委縮したりするせいでないかと思います。

別に説教をされたわけではありませんが、私は、大出世した親戚のおじたちの前にでても、一向に媚びず、自分の意見なり批判なりをちゃんとのべ、反対に、村の保護をうけぬと暮らしてゆかれないような貧しい人でも、そのまじめさを讃えた母を見て育ちました。

素裸な相手のかたちを見極めましょう、そうでないと、空まわりの人生になりはしませんか——この国と、私の母との貴重な教えです。

恙なく

十二時も近くなりましたから床につこうと思っておりますと、電話のベルが鳴りました。

「ママ。私、杏奈。ちょっと急いで教えてちょうだい。日本では、〝月火水木〟というふうに一週間がはじまるんでしょ。私たちはね〝日月火水〟といってるけど。そうね。今図書館で日本語の作文書いてる。試験じゃないんだけど、多忙多忙」

大学二年のこの娘は、高校時代に遊びに遊びました。遊び、という一語でまとめてしまったら、本人は不服でしょうけれど、ジャズダンス、ディスコ、体操、カヌー漕ぎ、スキー、テニス、陸上、それに演劇にミュージカルに多忙を極めました。ところが大学に入ったとたん、今度は猛勉強が始まりました。本人の告白によりますと、きちんきちんと点数をとっていかないと、黄色やピンク色の札に自分の名前が書きこまれ、〝要注意〟〝要要注意〟などと、掲示板にはり出されるのだそうです。ピンク色の〝要要注意〟のほうを三回だか繰り返しますと、その学生はアウトになるということです。

どうりで、こんなきびしい大学生活をくぐってきたアメリカ人は、すぐ、

「私の専攻はポリティカル・サイエンスだった」

などと申します。次いで、「あなたは、なになさったの」

と続くにきまっておりますから、本当にいやになります。私が大学に入った頃はまだ東京は食糧難でね、おひるは小さいポテト一つってこともあったわけ、だから勉強のほうにみが入らなかった、などいうこともいいわけになりませんし、音楽喫茶にも多額な授業料を払い、そこに通いつめた実績があるにしても、音楽専攻でない私が、ベートーヴェンの第九を全部暗記したことがある、とすげかえも出来ません。

本当にいったい何を考えて、若い日をすごしてしまったのだろうと思います。

アメリカの友人たちは、自分の現在のことに最大限の関心をもって話をする傾向がつよいので、私もそれに同調し、すぎ去った昔のことをあまりあれこれ考えることなく、長い間すごしておりました。

ところが最近、日本の女の人たちと会う機会が多くなり、よもやま話をしておりますと、パリッとアイロンのきいたエプロンをかけて、かわいい奥さんになることが長い間の夢だった、という人もいれば、現在の主人、あの人をつかまえるのにとても苦労した、もう一人の女とすさまじい争いをしたんですもの、だの、一日でも早く経済的に独立して、自分の家から出ていきたいと思った、と、過去のさまざまな望みや苦心や志のほどをきかされて、私はただあっけにとられてしまいます。私には、こうした体験が何もありません。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com